

profile

かしわざき・あかね●1992(平成4)年、埼玉県生まれ。大学では建築学科で意匠設計の研究室に所属していたが、就職活動の際に設備設計を志望。神社仏閣に興味があったことから、この分野に強みを持つ松井建設(株)へ入社。設備部設備課に配属され、現在に至る。



利益を左右する積算業務には、細心の注意を払って取り組んでいる。

「元々サッカー観戦が好きで、試合を観に行くうちに、スタジアム建築の魅力に引き込まれていきました。アーチの架かり方とか、雰囲気や観客席のつくりがどれも違っていて。海外にはアーチまで昇ってバンジージャンプができるところもあるそうです。あとは、スペイン旅行のとき観戦に行ったバルセロナのカンプ・ノウ。どうせなら一度は行ってみたいと…」
柏崎に建築の魅力を知れば、スタジアムに限らず、様々な建築の見どころを教えてください。いかに彼女が建築そのものに惹かれ、この仕事をしたいのか、十二分に伝わってくる。
「兄が神社仏閣やお城が好きで、一緒に『カッコいいね』って見るのが、子どもの頃から好きでした。図書館建築もいいですね。世界中に行ってみてみたい図書館がたくさんありますし、日本でも、特に大学の図書館などは見どころのあるところが多いですよ」
自分が、好きでカッコいいと思えるものを、

神社仏閣をつくりたい！

意匠設計や構造設計など、一言に設計といっても複数の分野があり、本連載でも様々な設計職のけんせつ小町を取り上げてきた。今回スポットを当てるのは「設備設計」。見えない部分だからこそ力を入れるべきなのだと言ってくれたのは、入社四年目の柏崎茜さんだ。

自分の思う、カッコいいものをつくりたい。そう語る柏崎だが、彼女の職種は設備設計。最終的に建物が完成したときには、ほとんどが見えなくなってしまう部分の設計を担当している。見えない部分なのに、カッコいいもの。どういうことなのだろうかと問うと、「外側だけじゃダメでしょうって思うんです」と力強く答えてくれた。「もちろん、見た目のよさで人の心を動かすことはすごく大事。幼い頃の私が建築物に惹かれたのも、見た目からでした。でも、それ以上に中身がしっかりしてないと意味がないなって、学生時代に気付いたんです」
設備設計の道に進もうと柏崎が考え始めたのは、就職活動のときだった。その建物を使う人が快適に過ごせるのか。機能を存分に発揮しているのか。建物としての価値を發揮するのに、設備が不十分であっては何の意味もない。柏崎にとって、建築の「カッコよさ」を実現するために「中身がしっかりしていること」は、必須の条件だったのだ。

「カッコよさ」を裏打ちするもの

仕事でもつくりたい。柏崎の感情と行動は非常にストリートだ。就職先に松井建設(株)を選んだのも、神社仏閣の建築に強みを持っている会社だから。「いつかはお寺の設計もやってみたいんです」。仕事の話をしているときは、それ自体がとても楽しそうだ。

輝け! けんせつ小町

設備設計

柏崎 茜

松井建設株式会社
東京支店 設備部 設備課



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning
建築を内側からカッコよくしたい

私がこの仕事を選んだ理由



上／現場に赴き、自分の目で施工の質を確認する柏崎。図面越しだけでなく、ナマの設備をしっかりと見据える。(写真提供：松井建設株)
 左上／「現場を経験して、最近は自分なりの意見を言うようになった」と柏崎を語るのは、神田設備部長。(写真提供：松井建設株)
 左／同期入社3人。それぞれの配属に分かれても、会えば会話が花が咲く。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

目指すは“設備まるごと”の専門家



打ち合わせでは真剣なトーンが続いたかと思えば、ふと笑い声が聞こえることも。穏やかに仕事をできる空気感が伝わってくる。

専門職だけど全部やる

設備設計と聞くと、非常に専門的な分野である印象を受けるが、柏崎によれば、松井建設の設備設計は他部署や他社と比較しても、特に業務の幅が広いのだという。設計図の作成はもちろんのこと、設備周りの積算も行うし、着工すれば週に一度は現場へ行って管理・検査業務。施主や協力会社と行う打ち合わせの資料づくりはしっかりと時間をかけて行い、自らプレゼンテーションまでする。入社前に想像していた以上に、総合力の求められる業務だそう。

「毎日やることが多くて、まだまだ慣れませんが、マルチタスクはあまり得意ではなかったのですが、目の前のことで精一杯になってしまいう日もあるんですよ。で、『あれ？ 何をやってたんだっけ？』って、パソコン上で開きっぱなしのたくさんフォルダやファイルを見ながら混乱したりして(笑)」

業務の幅は広いながらも、彼女の意識はあくまで「設備の専門家」。この仕事でスペシャリストになっていきたい。そして、自信をもって仕事ができるようになっていきたいのだという。

「早く『柏崎に任せた！』と、声を掛けてもらえる設備設計者になりたいです。私も『設備のことなら何でも私に！』と言いたいです」

その背景には、彼女の成長意欲の高さはもちろんのこと、入社してから柏崎が経験してきた、

悔しかった出来事も関係している。

「若手だから。女性だから。そういうことを理由に、交渉相手から心ない態度を取られたこともあるんですよね。もっと説得力のある資料をつくることできれば。もっと自信をもって交渉に臨み、相手から信頼されることができれば。年齢や性別に関係なく、一人前の設備設計者としての仕事をするには何が必要なのか、彼女は今まさに模索しているのかもしれない。

年齢や性別によって、仕事のやりにくさを感じたことがある人は、きっと世の中にたくさんいるだろう。しかし、属性だけで判断されることのない働きやすい環境は、関係者全員で考えていかなければ、実際にはつくることができない。柏崎のこれから期待をしながらも、社会に生きる私たちは、どうすれば良い方向への変化を生み出せるかと、彼女の語りをききかけとして何度でも意識しなければならぬのだ。

ここが設備設計のスタートライン

設計は、まさにモノづくりの感覚があつて楽しい。積算は利益を考えるパートだから、とても重要。設計図と施工図は、違う。小さなことにひとつずつ触れて、その感覚や学びを味わいながら、柏崎は前に進んできた。この春には、入社五年目を迎える。

これまでは、積算という入社してから初めて関わった業務に多くの時間を割いていた。積算



部内での打ち合わせの様子。自身の担当案件も持ち、いよいよひとり立ちの時を迎えつつある柏崎に、先輩社員たちからの期待も高い。

my style

週末はよくサッカー観戦に行っています。最近では、関東圏内を中心にいろいろなスタジアムで観戦するにはまわっていて、先日は日帰りで新潟に行ってきました。サッカーだけでなく、おいしいものを食べたり、観光名所に寄ったりと、小旅行気分で最高のリフレッシュになっています。



埼玉スタジアムで浦和レッズを応援。

補助として数多くのプロジェクトに関わってきたことで、今では積算の担当物件を持ち、費用を一人で算出できるようにまで成長した。そして現在、とあるプロジェクトに初めて立ち上がりから携わっている。図面を起こすところから始まり、施主や役所との打ち合わせにも同行し、設備設計や積算、管理の業務を受け持ち、竣工まで担当する予定だ。

設備設計者として、晴れてスタートラインに立った柏崎。ここからキャリアを積み上げて、ゆくゆくは神社仏閣やスタジアムなどのカッコいい建造物を手掛けることになることだろう。設備のすべてを手掛けるスペシャリストを目指し、柏崎は情熱を燃やし続ける。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと